

中晩柑「不知火」のこはん症は 8〜10月のかん水で軽減できる

川端義実

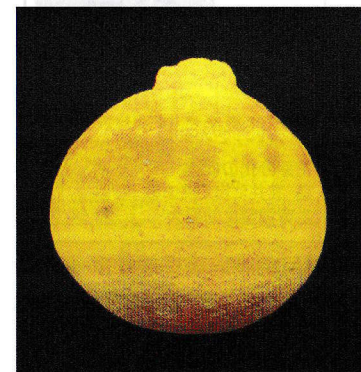
温暖化で増加傾向

こはん症とは、カンキツの果皮の一部が不規則に小さく陥没する生理障害の総称です。樹上にある果実や収穫後の果実に発生し、時には褐変も伴います。温州ミカンよりハッサク、ネーブル、清見などの中晩柑で多く発生します。しかし、発生の要因や仕組みなどは、まだはつきりとわかっていません。

果実発育期に 雨が少ないと発生

こはん症の発生は年次差が大きく、2016年産は13・15年産に比べて非常に少ない結果でした。降水量を比較すると、13・15年は9〜10月の降水量がとも少なく、土壌水分による影響が大きいと考えられます。

また、県内の中晩柑産地でこはん症



不知火のこはん症。
褐変も伴っている

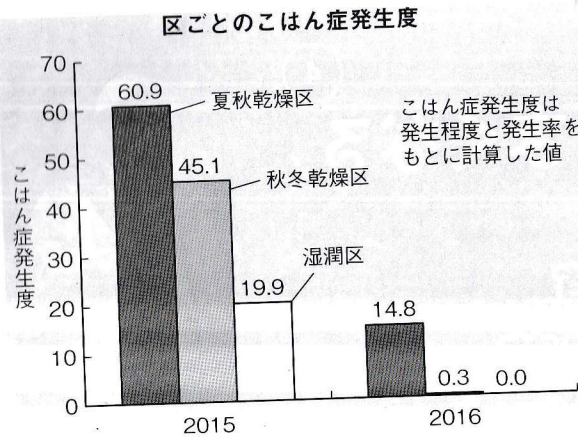
の多発生園と少発生園の園地・樹体条件の調査を行いました。その結果、以下のような傾向が見られました。

- ・乾燥しやすい土壌で、果実発育期（8〜10月）の土壌水分が少ないと多発する
- ・土壌水分が多くても、樹勢が低下している園では発生しやすい
- ・多発生園の樹の葉は小さくて葉色が淡く、葉中チッソ含量が低い

以上のことから、果実発育期の土壌乾燥や樹体の養水分不足が、こはん症の発生を助長する要因と考えられます。

8〜10月の土壌水分が大切

次に、こはん症の発生と土壌水分の関係を明らかにする試験を行ないました。不知火を用いて、表のような3区で栽培。収穫2カ月後の果実のこはん



8〜12月に3区に分けて管理

	8〜10月中旬	10月中旬〜12月
湿潤区	かん水	
夏秋乾燥区	シートマルチ	かん水
秋冬乾燥区	かん水	シートマルチ

*かん水は、1週間以上降雨がなかったら20〜30mm
*シートマルチは、雨を入れずに乾燥させる目的

が多く、湿潤区、秋冬乾燥区とも10月までの土壌水分を30%以上に高く維持できたので、こはん症の発生が少なかったと考えられます。

以上のことから、8〜10月の土壌水分を高く保つことで、不知火のこはん症の発生を軽減できることがわかりました。この期間の降水量が少ない年は、かん水やそれに併せた白黒マルチなどの保水用シートや敷きワラの活用でこはん症の発生軽減を期待できます。

また、果実発育期に肥料が不足して果皮が弱くなると、こはん症の発生が助長されます。とくに9月の初秋肥を怠ると発生が多くなります。適切に養水分を吸収させるためには、健全な樹勢を維持することも大切です。さらに、果実のポリエチレンフィルム個装による貯蔵中の過乾燥防止や、温度変化を少なくした結露にくい貯蔵管理も重要な対策の一つと考えられます。

(熊本県農業研究センター)